



◆今号の内容◆

・「貧しいが若い国～ハイチ」

・ 活動報告 ハイチ地震支援プロジェクト

四川省地震支援プロジェクト

青海省地震支援プロジェクト

アフガニスタン支援プロジェクト

インドネシア「呼び水」プロジェクト

「貧しいが若い国～ハイチ」

野崎 隆一

CODE理事／神戸まちづくり研究所理事・事務局長

私は8月31日から9月6日まで、先に現地に入って活動していたCODEメキシコ人研究員のクワウテモックと、支援対象となる活動と団体について調査を行うためにハイチ入りしました。キューバの南東に位置するイスパニョーラ島の西3分の1を占める国です。人口は810万人。コーヒーとサトウキビが主産物です。西アフリカ系黒人の世界初の独立国(1805年独立)という素晴らしい歴史を持つ国ですが、大国の思惑に翻弄され、政情不安の歴史を重ね、現在も世界最貧国と言われています。2004年からは国連のハイチ安定化ミッション(MINUSTAH)が稼働し、国連軍の駐留下で様々なプログラムが動いていました。

そんな状況下で今年1月12日午後4時53分(現地時間)マグニチュード7.0の地震が発生し、死者約22万人、負傷者約31万人、総人口の3分の1にあたる約300万人が被災しました。入国時には8ヶ月近くが経過していたにも関わらず、がれきの撤去は道路上しか行われておらず、仮設住宅の建設が遅れ130万人の被災者が公園や道路、空き地でテント暮らしをしている状態でした。

私が震源地レオガンと首都ポルト・オ・フランスで見た限りでは、多くのNGOが活動しているものの、未だに水・食料・医療・メンタルケアといった緊急支援が中心で、中長期を見据えた活動の展開を見つけるのが困難な状況でした。そんな中でも中長期的な視点を持ち始めている団体をいくつか紹介してみたいと思います。

AYUDA A HAITIは、ドミニカから最も早く現地入りしたNGOグループで、クワウテモックも含め多くの小規模な国際NGOが参入しています。現地の主要なNGOともうまく連携し、レオガンを中心に「保健・医療」や「子供・女性」分野での支援活動を行っていました。代表者のラファエルさんは、活動継続の拠点として、会議室や事務所、宿泊施設を備えた建物(コミュニティセンター)建設の夢を語ってくれました。

GEDDHは、やはりレオガンに拠点を置いて、シスター須藤昭子さん(注)が農業支援を行うために設立したNGOで、農業学校建設を計画していました。しかし、被災者が押し寄せ確保していた学校用地がテントで占拠されてしまい、中断となりました。並行して行っていたコミュニティ農業への支援をマイクロファイナンスを使って、さらに展開できないか提案しようとしています。

AGSISISは、首都の北側ラブレンという地域で活動しているNGOです。日本在住のハイチ人青年シャンヤ・ピエールマリさんが代表のルシアンさんや仲間と設立した団体で、子供達の教育支援を行っています。現在は、子供支援も続けながら、被災者が自立できるようなスモールビジネス立ち上げの支援もやっていきたいと考えているようです。

ハイチを離れる時にも雨期の到来とそれに伴う健康被害が心配でしたが、不幸にも中しコレラが広がりがつあるというニュースに接して胸が痛む想いです。ハイチに希望があるとすれば、日本と反対の超多子社会であることかもしれません。復興支援で子供達の教育支援が実現し、復興体験が子供達の自立と誇りを育てることができれば、災害をバネにハイチが生まれ変わることも夢ではないと思います。

(注:シスター須藤昭子さん……1976年以来、ハイチで結核治療のために活動してこられた日本人医師。)

◆ハイチ地震救援プロジェクト◆

～ハイチ地震～(ハイチ政府・UNOCHA)

日時:2010年1月12日午後4時53分(現地時間)

場所:首都ポルトープランス南西約17km

規模:マグニチュード7.0

被災者:約350万人

死者:22万2570人

負傷者:30万572人

避難者:約230万人(最大時)

損壊家屋:18万8383戸(うち全壊:10万5000戸)



▲地図:ジャパン・プラットフォームより

CODEは地震直後からメキシコ人研究員のクワウテモックさんを現地に派遣し、ラジオでのメッセージ発信、避難キャンプのコーディネート、孤児院訪問といった支援に当たってきました。

去る9月、今後の中長期的な支援を見据えた調査のため、野崎理事が現地を訪れました。未だ130万人がテントで生活しており、ガレキの撤去や医療など、復興の課題は多く残されています。10月下旬から流行し始めたコレラによっても、これまでに1715人が亡くなり、3万4000人以上が入院する事態となっています(11月30日、UNOCHA)。

しかしまた、被災地では「キャッシュ・フォー・ワーク」のプログラム(復興作業などの報酬として現金を得るもの)で働く若者や、露店で商いを行う人々が、たくましく前を向いて生きています。野崎理事が冒頭で紹介している3団体——Ayuda a Haiti、GEDDH、AC SIS——は既にクワウテモックさんが連携し、関係を築いてきている団体でもあります。CODEは彼らと共に、ハイチの人々の暮らしの再建を支援していきます。野崎理事の報告にもありましたが、各団体からの提案を受けて、CODEの支援プロジェクトも動き始めました。

・Ayuda a Haitiは、被災者どうしが集い、ともに学ぶ場としてワークショップなどを開催しており、それに利用するコミュニティセンター建設の提案を受けています。建設地や費用などの詳細について、現在調整中です。

・GEDDHへは、彼らがこれまで行ってきた農業支援を、マイクロファイナンスという形でサポートすることを検討中です。

・AC SISは、被災者(主に女性)が小規模事業を立ち上げるのに向けて、経営再建のプログラムを実施することを計画しています。これには生計向上のためのトレーニングやマイクロファイナンスが含まれます。



▲Ayuda a Haitiによる被災者向けワークショップの様式。



▲被災者自身が立ち上げたグループ「AC SIS」のメンバー(中3人)とクワウテモックさん(右端)、野崎理事(左端)。



▲被災者がテントで暮らしているキャンプサイト

◆四川省地震支援プロジェクト◆

2008年5月の地震発生以来がれき拾いから始まった活動を引き継ぎ、CODEスタッフ吉椿雅道を現地に派遣し続けてきました。そして、被災地の状況や人々の要望とを考慮し北川県光明村を含む村々に「総合活動センター」(医療施設等を含む)を建設する予定でしたが、これについては中国政府が建設することになりました。今回の訪問では道路等のインフラは見違えるようで、光明村ではその建物の外観は出来上がっていました。

以上のようなことから、私どもとしては、これまで築いてきた光明村の人たちとの絆を大切に、私どもの経験を基に、高齢者を孤立させることなく、元気づけるための方策を模索してまいりましたが、このたび村人たちの意思を尊重し、光明村に「老年活動センター」を建設することと致しました。

「老年活動センター」とは、中国の村では一般的な施設で、その名の通り高齢者が集い様々な活動を行うふれあいの場です。これを、いま香泉郷にはほとんどない木造の耐震モデルとして建築することにより、地震の際「木造の家は壊れにくかった」という人々の体験を具体的にアピールすることができます。そのため、高齢者の娯楽室、運動用スペースのほかに建物の骨組みが一部見えるようになった「震災展示室」を作ります。また、子ども向けの図書室も備えるなど、高齢者に限らず住民が広く利用できる場となる予定です。特産品作りなど、村おこしにつながる活動の拠点にしたいという話も出ています。

皆様には長らくご心配をおかけしましたが、去る11月20日、CODE代表理事が光明村を訪問して本プロジェクトに係る調印が下記の通り行われました。実際に着工に移るまでまだ楽観視はできませんが、今後も温かく見守っていただけますようお願い致します。



▲老年活動センターの完成イメージ図



▲光明村で行われた「第3回中日友好際」の様子

＜北川県香泉郷光明村老年活動センターに関する調印＞

日 時:2010年11月20日(土)

場 所:北川県香泉郷人民政府

調印者:CODE海外災害援助市民センター 代表理事 芹田健太郎

北川県香泉郷光明村村民委員会 (主任)村長 謝洪全

同席者:北川県香泉郷人民政府

書記 韓国軍

北川県香泉郷光明村村民委員会 書記 劉舒益

会計 馬長寿

婦女主任 陳美蓉

医師 彭廷国

CODE海外災害援助市民センター 吉椿雅道

老沈青年旅舎(SIM'S COZY GARDEN HOSTEL) 植田麻紀

◆青海省地震支援プロジェクト◆

2010年4月14日に、中国青海省玉樹を震源とするM7.1の地震が起きました。CODEは、2008年の四川省地震以来連協力いただいている成都のゲストハウス「Sim's Cozy Garden Hostel」と連携し、救援活動を立ち上げました。Sim'sはトラック1台を出して救援物資を運びましたが、被災地は標高3700メートル、悪路ということもあって、片道20時間以上もかかりました。

四川省地震の支援プロジェクトで成都に滞在しているCODEスタッフの吉椿は、6月に続き10月にも青海省の被災地、玉樹にて、支援に向けた調査を行いました。この地は1年のうち、冬を避けた4ヶ月しか再建作業ができないと言われます。10月には既に厳しい冬が到来しており、身が引き締まるような寒さです。最大の避難キャンプとなっている草原には、6月の倍以上のテントが並んでいました。収入源である漢方「冬虫夏草」を採りに山に入っていた人たちが、テントに戻ってきたのです。また、自

宅の敷地内でテント暮らしをしていた人たちが、再建作業のためにそこを離れて移動してきたということもあります。生活再建の目処が立っている人はごくわずかです。

この地に暮らすチベット族の生活は、主に半農半牧です。ここでは家畜であるヤク(黒く長い毛をもつウシ科の動物)が重要な役割を担います。畑を耕す力となり、乳や肉、毛皮を供し、糞は燃料になります。まさに「捨てるどころなし」のヤクも、多くが地震で死んでしまいました。CODEは、現地の文化や習慣を大切に、生活の再建を支援するというスタンスから、ここ青海省玉樹において、ヤクに注目した支援の可能性を検討しています。



▲青海省のチベット人の生活に欠かせない「ヤク」

◆アフガニスタン救援プロジェクト◆

昨年、3年に及ぶJICAの草の根地域提案型・農業技術研修を終えたミール・バチャ・コット村の研修生の皆さんは、学んだことを村で伝えながら実践しています。今年は雨が多く、収穫量が増えるかと思われていましたが、残念ながら結果は逆に、少なめだったそうです。今はまだ地元のマーケットで消費されるのみですが、販路開拓にも努めておられます。

♪♪♪写真展が行われました♪♪♪ 都市生活コミュニティセンターの主催で11月13日～16日、写真展「よみがえれアフガニスタンのぶどう畑」が西宮市市民交流センターにて開催されました(共催:生活クラブ生活協同組合都市生活、CODE)。ふだん目にする事の少ないアフガニスタンの様子に、たくさんの方々が熱心に見入って下さいました。はるばるミール・バチャ・コットの地からやってきた、素朴な甘さが魅力のレーズンをつまんでいただきながら、CODE理事・事務局長の村井もギャラリートークもたいへん好評をいただきました。

♪♪♪アフガニスタン・レーズンクッキー計画進行中♪♪♪ 実は、このミール・バチャ・コット産レーズンを使ったクッキーづくりを計画中です!アフガニスタンをもっと身近に感じていただくきっかけのひとつとして、高槻市にあるカフェ・コモンズ(日本スローワーク協会)とのコラボレーションで美味しいクッキーを作ります。CODEのボランティアで、カフェ・コモンズスタッフのSさんのおかげでこのレーズンが日本デビューすることになりました。「食べて美味しい」アフガニスタンにご興味をお持ちいただければ幸いです。完成すれば、まずはカフェ・コモンズの店頭やCODEの各種イベント等で少しずつ販売していきます(2010年末以降を予定)。

◆インドネシア「呼び水」プロジェクト◆

2006年にインドネシア・中部ジャワ地震の被害を受けた、ジャワ島中部の中心都市であるジョグジャカルタ市から約40km離れた、グヌンキドル県内のナワンガン集落。震災以前から水不足に悩まされていたこの村に、2008年、CODEは約1kmの水道管敷設を支援し、集落の人たち自身の手作業でこれが完成しました。その後は、乾季でも日常生活に必要な水が安価で買え

呼び水プロジェクト 関連年表

- 2006.5.27 ジャワ島中部地震、建築家エコ・プラウトさんとの出会い
- 2006.11 ボトクンチェン集落にて、住民の方々・エコさんらと協働で25軒の住宅再建「エコ・プロジェクト」完了
- 2008.2 次の支援策についてエコさんと話し合い、ナワンガン集落と出会う
- 2008.4 ナワンガン集落で、住民の方々・エコさんらと協働で水タンク・水道枝管敷設プロジェクト完了
- 2010.7 CODE、ナワンガン集落訪問。次の「呼び水プロジェクト」に向けた話し合い

るようになりました。

これを「呼び水」として、村の人たちは生計向上、地域経済の自立に向かって動き出しています。枝管の建設で結束した住民たちは、水管理組合の会合で少しずつ資金をプールし、生計向上のためのマイクロクレジット(小規模融資)も行われてきました。

しかし課題は、農業では十分な現金収入が得られないという現状です。特に、本当は村が好きで村で暮らしたいと思う若者も、やむを得ず町へ出ていってしまいます。このままでは村の過疎化、高齢化が進んでいきます。日本の農村でも同様のことが起こっていますが、住民どうし助け合いながらこれを解決しようというのが次の「呼び水プロジェクト」です。

7月のCODEの訪問時には、CODEのこれまでの経験と村の人たちのアイデアを交えて話し合いをしました。キャッサバ(芋)やピーナッツなど既存の



▲水管理組合のミーティングの様子

農作物から加工品を作ることや、新たに人気のある作物を育てること、村の特産品作りとそのための職業訓練などの可能性が出てきました。住民の方々自身がこれから具体的な計画を立てていきますので、CODEはパートナーのエコさん、また、エコさんの勤めるデュタ・ワチャナ・キリスト教大学(ジョグジャカルタ市)と共にサポートをしていきます。

CODE現地パートナーからの災害情報

～インドネシア・ジョグジャカルタ:ムラピ火山の噴火について～

日本のニュースでも報じられましたが、10月25日、インドネシア・スマトラ島沖のムンタワイ諸島で起きたM7.2の地震と、それに続く津波により509人が亡くなり、1ヶ月経っても1万1000人以上が避難生活を送っています。また翌26日、ジャワ島・ジョグジャカルタ州北部のムラピ火山が噴火し、304人が亡くなり、最大時には約40万人が避難しました。ジョグジャカルタ在住のエコさんによる情報では、CODEが支援しているナワンガン集落は火山から約50km離れており、幸い被害は無かったようです。既に噴火は収束に向かい、避難していた人は少しずつ自分の住んでいた地区に戻っていますが、被災者の中には家や家畜を失った人が多くいて、生活の再建が課題となっています。

そんな中、被災者の支援に携わっているAさんという女性があります。Aさんは、エコさんを通してCODEが出会ったアーティストです。他のアーティスト仲間との支援活動の様子を記したAさんからのメールには、災害を乗り越えてたくましく生きようとする人たちの姿がありました。そのメールの一部をご紹介します。

——「私たちは支援している村の方々と話し合い、問題点や解決方法、関心事などについて共有を始めました。新しい生活について考えるためです。悲しくなるときもありますが、皆とても熱心で、楽観的でユーモアがあり、そのことに私は本当に感動しました。彼らはとても強い人たちだと思います。すべてを失ってもなお、前向きなエネルギーで将来に希望をもっています。いまはまず、道や家の残骸を片付けようとしています。また、養鶏場の代わりに、より経済的なウサギ飼育場の設立に取り組み始めました。これが今後の生計手段となります。その管理は、新しい「共同型」のシステムで始めようと思っています。避難している人たちが仮設住宅に移れば、具体的に実施できると思います。

また、私たちの別のグループは、専門家と一緒に、降灰の影響を調査しています。どんな植物を植えれば土地を維持することが可能かを調べています。水も大きな問題です。いま私たちが支援している人たちの村では、すべての水源がだめになったからです。ですから村に帰る許可が出たら、新しい水源を探さなくてはなりません。とにかく、村人全員が、計画にもとづいて自ら活動に取り組んでいます。私たち支援者は彼らをサポートし、違う視点から意見を言ったりしています。

ところで、冷えた溶岩が洪水となってジョグジャカルタにやってきました。昨夜(11月29日)少なくとも3名が遺体で見つかり、川岸にあるいくつかの家が壊れました。毎日のように激しい雨が降っており、人々はまた別の脅威に怯えています。」——

こうした情報を引き続き現地のパートナーを通して収集し、随時メーリングリストやHPで配信していきます。

活動記録 2010/6/13～11/30

6月19日	CODE理事会・総会・CODEの夕べ	一郎さん)
6月22日	神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義(斉藤富雄さん)	7月9日 寺子屋セミナー「NGOは誰を代表するのか～「最後の一人」まで」(芹田代表)
6月23日	本願寺社務所にてハイチ地震寄付の贈呈(村井理事、岡本)	7月13日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義(村井理事)
	寺子屋セミナー「中国・青海省地震報告会」(吉椿)	7月14～23日 インドネシア・ジャワ 呼び水プロジェクトの事前調査(村井理事・岡本)
6月25日	寺子屋セミナー「最底辺の10億人の国～ミレニアム開発目標からみたハイチ」(浅野壽夫さん)	7月16日 関西NGO協議会理事会(欠席)
6月29日	神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義(松本誠さん)	7月20日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義(浅野先生)
		7月21～9月9日 四川地震第13次派遣(吉椿)
7月3日	読売防災セミナー(福岡)「青海省地震報告」(吉椿)	7月27日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義(浅野先生、村井理事)
7月6日	神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義(本野	8月1日 寺子屋セミナー「ハイチ地震の被災者によるグルー

- ブ“AC SIS”の支援活動 ～ハイチから学ぶ～(ピエールマリさん・岡 智子さんご夫妻)
- 8月24日 JICAハイチ国別研修事前調査帰国報告会に参加(村井理事・野崎理事)
- 8月28日 災害看護学会でシンポジウムのパネリスト(村井理事)
- 8月31日 都市生活コミュニティセンターのセミナー「“共同”は海を渡り、そして国境を越えた！」で講演(村井理事)
- 9月14日 舞子高校で講義(村井理事)
関西NGO協議会理事会(村井理事)
- 9月16日 「災害対策をめぐる国際協力」第3回研究会(村井理事)
- 9月17日 外務省シンポジウム「効果的な災害対応に向けて」に参加(村井理事)
CODE理事会
- 9月29日 パナソニック提供・龍谷講座in大阪「緊急救援・復興支援の現場から」のパネリスト(村井理事)
- 10月13～11月3日 四川地震第14次派遣(吉椿)
- 10月16日 神戸学院大学 安心・安全社会システム研究会に参加(村井理事)
- 10月20～29日 第二次青海省調査(吉椿)
- 10月28日 関西NGO協議会 理事会(村井理事)
- 10月29日 関西学院大学社会学部・神学部で講義「NGO論」(村井理事)
- 11月8日 神戸松蔭女子大学にて講義(吉椿)
- 11月13日 神戸大学都市安全研究センター災害復興報告会「四川大地震・青海省復興のその後」基調報告(吉椿)
- 11月13～16日 写真展「よみがえれアフガニスタンのぶどう畑」(主催:都市生活コミュニティセンター、共催:生活クラブ生活協同組合都市生活、CODE)
- 11月17日～ 四川省地震15次派遣(吉椿)
- 7月19～23日 四川省における老年活動センター建設の調印式に出席(芹田代表)
- 11月28日 CODE寺子屋セミナー「ハイチの歴史を学ぶ」(主体:とんだばやし国際交流協会、共催:JICA大阪、協力:CODE)

ありがとうございます～会員・寄付者ご芳名(以下順不同・敬称略)～ 2010/6/13～11/30

◆一般寄付(災害救援は除く)

個人: 浅井里依子、市村隆玄、井上由紀子、大槻輝美、大野武子、桂光子、斉藤茂樹、斉藤容子、白水土郎、菅磨志保、高橋澄枝、塚本謙三、中谷勇一、成毛典子、水嶋勉、宮崎洋介、山本良治
団体: アート・サポートセンター神戸、静岡県仏教婦人会、売布コープ委員会

◆正会員

個人: 榛木恵子、野崎隆一、橋口文博、藤野一夫、松本誠、山地

久美子
団体: 特定非営利活動法人JIPPO、阪神高齢者・障害者支援ネットワーク

◆賛助会員

個人: 上田耕蔵、江口節、圓成啓彰、梶谷由美子、片岡幸壺、菊田歌雄、栗原謙治、白水土郎、菅磨志保、鈴木有、成毛典子、難波緑、西山安子、服部正、兵頭春喜、前畑美智子、水野浩重、室崎益輝
団体: アート・サポートセンター神戸、神戸公務員ボランティア、(有)村井新聞店、祐川寺

年末カンパのお願い

今年も1年、CODEをあたたく見守って下さりありがとうございました。本ニュースレターの発行元でもある事務局の管理・運営は皆様からのカンパにより成り立っております。ここに年末のカンパを呼びかけさせていただきますので、ご協力いただけますようお願い致します。(同封の振込用紙に「カンパ」とご記入下さい)。

※各プロジェクトへの寄付の場合はハイチ、青海省、青海省、アフガニスタン、インドネシア「呼び水」などとプロジェクト名をご記入下さい

編集後記

9月末から1ヶ月間、インドネシアのカウンターパートである建築家・アーティストのエコ・ブラウオットさんと、リナ・ブラウオットさんご夫婦が来日されていました。エコさんは、人と人とのつながりや人と自然との共生を尊重される方で、書き留めておきたくなる名言が次々に飛び出します。あるとき出会った方から「あなたにとって芸術とは何ですか？」と質問を受けたエコさん。その印象的な答えをご紹介します。——「私にとって芸術(Art)とは、決して自分のメッセージを『さあ見て下さい!』と人々の前に表現する手段ではありません。それは一方通行になってしまいます。私の作品は人と一緒につくりだすものです。あれこれ話しながらコミュニティの人と作業をしていると、人々の中にあるコミュニティへの愛、自然への愛、思い出といったものが紡ぎ出されてきます。それがアートになるのです」——プロジェクトにおいても同じ。エコさんは決して自分の考えを押しつけることはせず、ファシリテーター(調整役)に徹します。村の人自身が答えを出し、動き始めるのを見守っています。なお、徳島県上勝町というとても素敵な町で、この言葉を象徴するエコさんの作品を見ることができません。機会があればぜひ訪れてみてください。(C.O)